「〈日本人〉の境界」を読む

研究に新たな境界線

屋嘉比　収

本書は、近代日本における「日本人」および「日本」という概念を再検討した、文字どおりの大作である。今後本書は、その分野の研究のみならず近代日本のアイデンティティーを考察するうえで、疑いなく一つの画期をなす書物となろう。

まず本書で圧倒されるのが、その浩瀚(こうかん)な分量である。四百字詰め原稿用紙の約二千枚、本文に索引を含めたページ数はじつに七百七十八ページを数える。本文は序章・結論と二十三章の章立てから構成され、その分析領域は近代日本における沖縄、アイヌ、台湾、朝鮮(章の内訳は沖縄が十章、アイヌが一章、台湾が四章、朝鮮が七章、他が一章)に及ぶ。また分析する時期も明治初期の琉球処分から戦後の復帰運動までの長期にわたっている。

本書は、近代日本の周辺地域―著者によると、「日本人」の境界にあたり「日本人」であって「日本人」でない存在―沖縄、アイヌ、台湾、朝鮮をめぐる政策論の言説、とくに教育と法制が重要視され検証されている。その検証で「日本人」の境界がどのように設定されたかを探究して、逆に「日本人」とは何かを浮き彫りしている。そして、「日本人」が、自明で不動の実体ではなく、「時代や状況によって変動する言説上の概念」であることが明快に分析されている。

また他方ではその「日本人」の境界に位置する言論人として、沖縄の伊波普猷や新川明、朝鮮の朴春琴、台湾の林献堂や蔡培火らの言論を取り上げ、彼らが支配者の言葉を自分たちの言葉に読み替えて抗(あらが)ったことを指摘し、その両義性について分析している。個人的には、戦前に唯一朝鮮人衆議院議員になった朴春琴に関する分析が強い印象に残った。また、新川明をクレオールの論者として分析した記述は出色の新川論に思えた。

ところで著者は、前著の『単一民族論の起源』において、従来の通念とは違い、戦前の日本では「混合民族論」が主流で、「単一民族論」は戦後に正当化された論調であることを明らかにし高い評価を受けた。その成果は、著者の二次文献を「読み直す」(上野千鶴子)作業を通してもたらされたもので、その「読み直し」という手法は、一次資料を含めて本書でも一貫して貫かれている。

そしてさらに注目される点は、前著に対して行われた。いくつかの批判(序章・注(7)、『歴史学研究』六九二号、他)を、本書の中に組み込み、序章においてそれに応答する形で新たな論点を提出していることである。言説と現実との接点としての政策論への着眼や、日本対植民地という二項対立図式を避けるため欧米という第三項を加え、支配・被支配の内部の多様性に注目する点など重要な論点を提起している。その前著への批判を組み込むことにより、本書は一段と密度の濃い内容となっている。

しかしながら、結論の部分では次のような違和感をもったことも同じく付記しておきたい。

それは、「有色の帝国」とマイノリティーの両義性についての同質性に対する指摘である。著者によると、欧米や白人から差別と侵略にさらされ、アジア地域を侵略支配した「有色の帝国」日本の両義性と、マイノリティー・ナショナリズムにより、強者に対抗しながら逆に弱者を支配してゆくマイノリティーの両義性とは、同質なものだという。確かに著者が指摘するように、その両者のもつ両義性が同質であると言及できないことはない。

しかしそれは、両者の論理構造における同質性の指摘ではないか。むしろ議論の文脈からすると、両者の構造の同質性を指摘するのではなく、おのおのの固有の歴史性に着目し、その歴史的差異を強調すべきだったのではないか。そのことは、結論の注釈で著者が沖縄の基地問題に対し、歴史的側面を捨象して原理的側面だけで考察しようとする語り口にも表れている。それは、著者の語りの位置の問題ともかかわっているように思える。

ともあれ、紙幅の関係でその他の刺激的な論点に言及できなかったが、本書の刊行によって新たな研究の境界線が引かれたことは間違いない。

なお、評者は五月に歴研近代史部会で、私たちはいつ日本民族になったのかというテーマで報告した(報告集は『歴史学研究』十月号近刊)。琉球処分や伊波普猷への論点で本書と重なる点があり、ご参照いただければ幸いである。

(九州大学大学院生)

小熊英二著「〈日本人〉の境界」は新曜社刊、五八〇〇円。